

掌大の小噺

サクウマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こいしちゃん以外のお気に入り小説のまとめです。

オムニバスでパラレルワールドな短編集です。

ふと幻想の香りが恋しくなったときに、どうぞ。

- ・一話完結なのでどこからでも読めます
- ・作品ごとに世界観に多少の差異が存在します
- ・長さはまちまちです
- ・創想話で投稿した作品をまとめなおしたものです

以上のことを留意してお読みいただくことをお勧めいたします。

目次

第一編	登場：ルーミア	1
第二編	登場：自機人間組	7
第三編	登場：黒谷ヤマメ 水橋パルスィ	12

第一編 登場：ルーミア

【ものぐさのはなし】

かつて外来人と、一晚限りで語り合ったことがある。

外来人の男は自殺をしようと山へ入ったのだと言っていた。生きていくことに疲れたのだと。

ならばその死後の屍は私にくれてはくれまいか、そう尋ねると好きなようにすればいいと返ってきた。きつと面倒だったのだろう。

「しかしお伺いをたてるなんて妙なことをするね。さつさと襲えばそれで終わりだろうに」

男の言葉に、あーと間の抜けた声を出して私は首を傾けたように思う。

「でもそれは面倒なもの。牡丹餅の降るのが分かっていたら、いくらでも待つ性分だから」

「ものぐさだね」

「よくそれでからかわれる」

「褒めているのさ」

「ふうん？」

男は確か、そこで懐かしむような目を見せたのだったか。

「我々の業界ではね、怠惰であることは美德とされている」

私は横目で続きを促した。

「横着は技術の母。水車だって、人が粉挽きを苦にしないならそこで使われることはなかっただろうってね」

「素敵なところね」

私はその言葉を口に出したのか否かは、ぼんやりとして判然としない。

翌日の朝に男は首を括り、私はそれを余さず食した。残った骨はいつの間にもやら無くなっていたが、その言葉は今でも頭にこびりついている。

異変を起こしたことがある。紅い霧の異変の、その数年ほど昔のことだ。

綺麗な満月の日であった。それを覚えているのは、巫女に地に叩きつけられた時に、そのまま夜空を見上げたからだ。

「あんたは平和主義だったように思うんだけど、勘違いだったかしら？」

それを虚空に浮かんで見下ろす巫女は、今の彼女の姿と殆ど同じような姿かたちであった。ああ、今宵が月喰む夜であれば、彼女はひどく映えるろうになあ。そんなことをぼつりと考えた記憶がある。

「勘違いだよ。私は単にもぐさなの」

「ならますます腑に落ちないわね。どうして異変なんか起こしたのかしら」

その通りである。今の私とてそう思う。少なくとも当時から私は、先の怠惰のために今の怠惰を犠牲にするような、そういう性分ではないはずなのだが。

けれど、私はそのとき確かに言ったのだ。

「退治されて、封印されたら、今よりもっと楽なんじゃないかって」
巫女は、深くため息を吐いた。

そのため息が、私への呆れから来たものなのか、或いは封印を施すことへの億劫さから来たものだったのかは、私には未だに判然としない。

閻魔さまに言われて、私の狩りを見せることになった。

花の綺麗な、ある日の夜のことである。

見せる、とは言ったものの、私の狩りというものは行き当たりばったりで受動的なのだ。うまく今夜のうちに獲物が見つかるかは、私にも分からないことである。そのことは閻魔さまにも伝えたのだけど、それなら獲物に出逢うまで待ちましようなんて言われてしまったのでしようもない。音は出さないと頼んだから足音とかはしないけど、でもずっと視線を向けられるのは居心地が悪くて仕方ない。

早く獲物が見つからないかな、なんて思いながら林をうろつくこと3時間。しかし今日の私は運がよかつたらしかった。

つまり、迷子の人間がいたのである。

私は人間に音もなく近づいた。たとえば高尚な技術でも使っていないようだが、実際は日頃と変わらない。宙に浮かんで、枝に当たらぬよう移動するだけ。こういうときは、私が小柄で良かったと思う。

そして人間を闇で覆って、ついでに首筋に噛みついておく。そうすれば、私の狩りは殆ど終わりなのである。

半狂乱になった人間は私を振り払って逃げ出した。ややあって、ぐしやりと嫌な音が響く。その後に絶叫が響かないということは、息絶えたのか、気絶したのか、瀕死なのか。どれにしたって、今日はつくづく運が良い。

「それが、あなたの狩りですか」

「うん、いつもこう上手くいくとは限らないけど」

なにしろ、偶然近くに崖があつて、さらに偶然そっちへ逃がすのだから、よほどでないところはいいかない。普段ならば、猟師の罠にかかったり、それか石に蹴躓いて転んだりする程度である。そういうときは、気を失うまで待つ必要があるのだから、まったく面倒なことこの上ないのだ。

閻魔さまの質問に応えながら私は崖を降りた。人間は首が折れていた。続いて降りてきた閻魔さまに人間の腕を持ち上げて食べるか尋ねただけど、もちろん断られた。当然である。

「しかしその方法だと、効率が悪いでしょう」

「いただきます、と手を合わせたところで、閻魔さまはそう言った。

「まあ、悪いよ。運が悪いと逃げられるし」

「では、何故その狩りかたを選んだのですか？」

「私はものぐさなの。楽な方法を選ぶのは当然よ」

「本当にそうですか？その割に、徒労は厭われないようですが」

「徒労？」私は肉を噛み千切って首を傾げた。「もしかして、人間を取り逃がしたときの話？」

「ええ、その話です」

「でも逃げ帰れた人間は、私の噂を広めてくれる」

妖怪にとつて、噂になるということは、活力の源のようなものなのだ。私のような、種族のない妖怪には、特に。

「だから、徒労じゃない」

私の言葉に閻魔さまは、満足そうに頷いた。

「それを分かっているなければ説教するつもりだったのですが、取り越し苦労でしたね」

「そうなんだ」

私は黙々と食事を続けた。けれど閻魔さまは、それ以上はなにも言わなかった。

「……それだけ?」

「ええ。私から言うべきことはそれだけです。無論、疑問があるなら答えますが」

本当に、それを言うためだけに来たようだった。

閻魔さまというのは、存外、暇らしい。そう思いながら、ああそーいえば、と私は閻魔さまに一つ尋ねた。

「ものぐさなのは、悪徳じゃないの?」

「怠惰の罪。西の思想ですね」

閻魔さまの言葉はすらすらと並び立ち、まるで淀むことを知らないかのようなだった。

「原典が手元にありませんから向こうの事情に確かなことは言えませんが、少なくともこちらでは怠惰は即ち黒、ということはありません。無論、己が職務に差し障りない範囲において、ですが」

「……そうなのか」

私は食事の手を止めて、小さな声で呟いた。

すると案外、あのものぐさであった外来人は、天国に行けたのやもしれない。そう思つての言葉だった。

一応、男の白黒は、目の前の閻魔さまに訊ねればたちどころに答えは出ると思われた。しかし私はそれをしなかった。

面倒だったのだ。

「おう、ルーミアじゃないか」

声が聞こえたので闇を解くと、そこには魔法使いの人間がいた。

「あー。久しいね、……人間」

「あつこいつ名前思い出すの諦めやがった」

「そんなことないよ」私は言った。他人の名前など覚えようとしたことすらないのだから、当然である。

「まあいい、それよりお前はそんなところで何やってるんだ？」

「横になってるの」

「それは分かる」

そう言われても、困る。元よりなにかしているわけではないのだ。

「気になるなら、来る？」

「食われそうな気がするぜ」

「食べないよ。抵抗されたら、面倒だし」

実際、魔法使いの人間は、かなり強いのである。襲ったとしても、明らかに割に合わない。

「そのものぐさっぷりは相変わらずだな」

苦笑しながら、魔法使いの、……もう人間でいいか。人間が、私の横に降りてきて、そして横になった。

それを見計らって、私は再び闇を広げる。

「…暗いな」

「夜だもの」

「夜？今は昼間じゃないか」

「うん。でも、ここは夜だ」

「ああ、宵闇だからか」

人間は笑った。私も、少し笑った。

「じゃあ、私は寝るよ」

「おいおい、それはさすがに怠惰が過ぎるぜ」

「怠惰というのは、一部の界限では、美德なんだよ」

「そいつは面白いな、転職したらどうだ？」

「やだよ面倒くさい」

「だろうなあ」

呆れたような人間の声を聞きながら、私は目を閉じた。次に目を開けたときには、人間はもういないのだろう。そんなことを思いながらも、だからといって何かしようという気にもならず、そのまま私は意識を黒く塗りつぶした。

第二編 登場：自機人間組

【かつて人間だったひとでなしどもへ】

博麗霊夢は目を覚ますと、自身が妖精になっていることに気づいた。

「あーたぶんこれ私、妖精になってるわ」

霊夢は布団の中で、そう呟いた。

さしたる根拠はなかった。

しかし、そんな気がしたのである。

つまり、いつもの勘であった。

「そういえばやけに背中がむずむずするわね」

そう思っただけで起き上がり背中を見ると、なるほどそこには羽があった。

「羽ってかこれ、陰陽玉だけど」

どう見ても羽ではなかったが、しかし霊夢の勘はそれを羽と言っただけでなかった。

「まあ、チルノの羽もあれだし」

そんなもんか、と雑に納得する姿は、なるほど春頭の巫女であった。

「でもどうして妖精なんかに」

「その疑問には私がお答えしましょう」

「出た胡散臭いの」

霊夢の独り言を拾ったのは、スキマ妖怪こと八雲紫であった。

いつの間にかやらスキマから覗き見をしていたらしい。まったくいい根性してるわね、と霊夢は呆れ気味である。

「やっぱあんたの仕業なわけ？」

「あら、そんなことはありませんわ。これに関しては私は何も干渉していませんもの」

「まあ、そうでしょうね」

霊夢はあっさりと矛を収めた。もともと妖怪が目の前に現れたか

らとりあえず尋ねたというだけのことであつたし、何より霊夢の勘は紫を元凶であるとは告げていなかったのだ。

「まあこの件については、主犯などというものはいないに等しいのですけれど」

「どういふことよ」

霊夢は紫の顔を眺めたが、相変わらずの胡散臭い表情からはなにも読み取ることはできなかった。

「妖精とは現象の受肉したもの。その中でも恐れられることもなく、敬われることもなく、ただただそうあるものと認識されたものですよ。水が冷えると氷となり、芋虫が蛹を経て蝶となるのと同様に、貴方が出会い頭に妖怪を退治するのも、ある種の摂理として認識されたということですよ」

霊夢は記憶を巡らせた。見かけた唐傘妖を殴り飛ばしたことを思い返し、通りすがりの宵闇妖に陰陽玉をぶつけたことを思い返し、寄ってきた虫妖を針鼠にしたことを思い返した。

「??？」

そして全くわからないと首を振った。

それを見て紫は少し微笑んだ。

「そのくらいが貴方らしいわ。それに結局のところ、貴方はこれからそのままでもいいということなのですから」

霊夢は、とりあえず紫の頭頂部にお祓い棒を叩きつけた。そして痛みを訴える紫を放置したままお茶を淹れると、そのまま縁側でのんびりすることにした。

霊夢には、紫の話は微塵も伝わっていなかった。しかし霊夢の勘は、とりあえずいつも通りに過ごせばいいのだと、そう彼女に告げていたのだ。

霧雨魔理沙は目を覚ますと、自身が妖怪になっていることに気づいた。

魔理沙の目に最初に映ったのは、辺りに飛び散った金属片だった。

数秒の思考の後に、彼女は液体窒素缶の蓋をきっちり閉めていなかったことに思い至った。

魔理沙は飛び起きて壁に並べられた瓶を検分して、そのうちのいくつかが砕けていることを確認すると、大きく肩を落とした。

そしてとぼとぼと布団に戻ろうとして、そこでようやく布団に大量の金属片が刺さっていることと、その割に己の肉体には傷一つないと気づいたのだ。

「こいつは、妙なことになってるな」

魔理沙は呟いた。試しにそこいらの金属片で指に切り傷を付けてみると、それがじわじわと塞がっていく様子を観察できた。同じ光景を魔理沙は見たことがあった。妖怪の怪我の治り方と同じだったのだ。

「ついに私は妖怪になっちまったのか。参ったなこれは」

魔理沙は文句を呟いて、それからとりあえず霊夢に見せようと思いついた。

「箒はどこに置いたっけか」

呟いた時には手に箒が握られていた。どうやら任意に呼び出せるらしかった。

「いよいよもって人外だぜ」

苦笑いして、魔理沙は家を飛び出した。

そして博麗神社に着くや否や、霊夢に退治されることとなった。

東風谷早苗は目を覚ますと、自身が現人神になっていることに気づいた。

当時の彼女は中二病真つ盛りであったから、自分は選ばれし人間であると信じて憚ることはなかった。彼女が神主の家系であることと、家に二柱の神がいること、加えて彼女がその二柱の子孫であるという事実が、彼女の中二病を更に加速させていた。

そのような状態であったから、ある日早苗が目覚めたときに得体のしれない万能感を感じた時も、彼女は「ああ、遂にこの日が来ました

か」とだけ感じて、その万能感に違和感を覚えることは全くなかった。「今なら私、空をも飛べる気がします」

早苗はそう呟いた。そしてそれは強ち間違いではなかった。無論、彼女の言葉も確信に満ちていた。

しかし、彼女は空の飛び方など知らなかったのだ。

早苗は二階のベランダから宙へ身を投げ出した。そして自由落下の感覚に首を傾げた。次いで神奈子にその身を受け止められた。

「飛び方も知らないのに無茶するんじゃない」

神奈子は苦笑交じりにそう言った。早苗はむむむと唸った。こんなはずではなかったのですが、と。

「早苗。私と諏訪子は、新天地を目指そうと思うんだ」

神奈子は歩きがてら、そう早苗に話して聞かせた。

「この世界に、我々の居場所などもうない。けれど幸い、我々のような者たちを受け入れる場所があると聞いている。我々は、そこに行こうと思うんだ。なあ早苗。お前は、どうする？」

早苗の答えは、考えるまでもなかった。

「ついていきますー！」

なぜなら、早苗は中二病であったから。

十六夜咲夜は目を覚まして、十六夜咲夜のままであった。

起床。然して時間停止。

常に瀟洒であるためには、これから起こりうる出来事を事前に知っておくことが肝要である。それが咲夜の考えであった。

部屋を見回す。特に変なものは見受けられない。うんと伸びをして、念のためにいちいち物陰を見て回る。

いつもはこれは杞憂で終わる。そもそもメイド長如きの部屋になにかを仕掛ける方が珍しいのだ。当然である。

「あら」

しかし今日は違ったらしい。

そこにいたのは、紅魔館が主のレミリア・スカーレット、それにそ

の妹君のフランドール・スカーレットであった。

なかなかお目にかかれない、仲睦まじげな二人の表情に、咲夜の表情が少しばかり緩む。

「しかしお嬢様も妹様も、こんなところで何をしてらっしゃるのでしょうか」

咲夜は疑問を抱いて、二人の手に持つ旗のようなものを見て、そこに書かれている文字を覗き込んで、そしてなるほどと得心した。

「もう、そんなに経つのですね」

咲夜の呟きは、誰にも聞かれぬまま消えていった。

ベッドに戻り、様子を整えて、目を瞑る。折角お二人がサプライズを用意してくださったのだ。無下にするわけにもいくまいし、何より咲夜は嬉しかった。

「しかし時間を操れると、どうも感覚がおかしくなっていけませんね」

かくして時は動き出す。咲夜は今日覚めた体で伸びをする。彼女の仕えるお二人が物陰から飛び出して、「咲夜、メイド長就任200周年おめでとう！」と、そう叫ぶまで、あと数瞬。

第三編 登場：黒谷ヤマメ 水橋パルスィ

【つちのしたにて】

「私ね、昔は神をやっていたの」

パルスィが唐突にそんなことを言うものだから、私はひどく驚いた。

「……あー、崇神ね」

「違う」

「縁切りとかしてたわけだ」

「違うから」

どれだけ驚いたかといえ、こんな詰まらない冗談しか飛ばせなかつたぐらい、と言えば伝わるだろうか。

「まあ、神とは言っても今とやっていたことは変わらないわ。嫉妬を食べて失わせるだけ」

「ははあ、夫婦円満の神様ってわけね」

「そういうこと」

そう言っただけパルスィは口を閉ざした。おおかた昔を思い出して感慨に耽っているのだろうけど、私としては疑問が残る。

「でもそれならさ、なんで封印なんかされたのさ」

尋ねると、パルスィはふうとため息をついた。

「私からすれば名案に思えたのよね……」

「なにが？」

「嫉妬の養殖」

「よーしなるほどよく分かった」

パルスィは、腑に落ちないと文句をこぼした。

「あれを見てたら、ふと昔のことを思い出したのよ」

パルスィの指差した先には、地底に輝く太陽があった。

間欠泉異変の後、間接的な方の元凶こと靈鳥路空は、いくつかの新しい仕事を与えられることになったという。その一つが、旧都を太陽で照らすこと。毎朝決まった時間に彼女は小さな太陽を打ち上げて、旧都に朝の訪れを告げるのだ。

「私は地底に封印されて、信仰も全て失って、ただの橋守まで落ちぶれた。かたやあいつは今や地底の信仰を一身に受けた飛ぶ鳥も落とす太陽神。ああまったく、妬ましいいったらありやしないわ」

パルスイはそうは言いながらも、その顔は実に楽しげだった。

それを何故かと尋ねると、パルスイは首を傾げて言った。

「当然の話よ。ぽっと出の成り上がりが身近にいるなんて、嫉妬を食べる身としてこれほどいいことはなかなかないもの」

パルスイの感慨に耽っているのを見ながら、私もまた過去を想っていた。

といつても、私の過去なんてものは平凡極まりない。隠れ住んでいたところを都の貴族に目を付けられ、一族丸ごと殺された。それだけだ。

その程度の傷など、ここにいる奴なら誰でも持つている。話の種類にもなりやしない、なんの役にも立たない過去だ。

それに比べてパルスイは、と私はちらりと目を向けた。

神となった過去。やらかした過去。口に出すことこそないけれど、刺激的な半生を送ってきたことが窺えて。

彼女の弁ではないけど、——私はパルスイのことが、急に妬ましくなってしまった。

「……美味しい」

「パルスイ、なにか言った？」

「独り言よ。気にしなくていいわ」

・
・
・

「ヤマメはいいやつよ。嫉妬を煽るとすぐ乗せられるし、味もなかなか上質なもの。それに、何度やっても私の仕業と気付かないのも好感度高いわね」

———水橋パルスィ 「文々。新聞独自クロスレビューー 地底編」より抜粋